

## 同一化と意識の二重化について

著者	青柳 寛之
雑誌名	甲南大学学生相談室紀要
号	8
ページ	22-29
発行年	2001-02-28
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00003636">http://doi.org/10.14990/00003636</a>

## 同一化と意識の二重化について

甲南大学学生相談室 青柳 寛之

### はじめに

筆者は前著(1997)で、競争心というテーマについて考察したが、その中で、文字通りの競争という行為の背景に、「ひとりの人の心に、それまでであった視点とは別の視点が加わり、いわば意識が二重化し、それを通じて心が複雑になっていく」という心理学的テーマが存在することを示した。本論文では、このテーマについて、意識にもうひとつの視点を導入する働きとしての「同一化」と、その結果としての「意識の二重化」もしくは「関係の場の分割」ということに焦点を合わせ、さらに検討を深めたいと思う。

### I. 同一化

まず、同一化という言葉の意味を確認しておく。Laplanche と Pontalis の精神分析用語事典(1976)には次のように説明されている。「ある主体が他の主体の外観、特性、属性をわがものにし、その手本に従って、全体的にあるいは部分的に変容する心理的過程。人格は一連の同一化によって形成され分化してゆく。」これが最も主要な説明で、同一化ということの骨組みを示している。しかしまた、「通常の用法では、模倣、感情移入、共感、精神的伝染、投射などのような心理学上の概念に対応している。」とあることから、同一化という同じ言葉を用いていても、かなり広範囲の心理学的現象を含んでいるとみなすことができる。

意識的に同一化を行う場合を考えると、その概念の骨組みがわかりやすくなるであろう。たとえば役者がある役を演ずる場合である。役者はその役の人物になり切らねばならない。役の人物がどのように感じた結果、あるひとつの行動をしたの

か、などということをしてできるだけ生き生きとつかむ必要がある。そのために必要とあれば同じような生活をしてみたり、同じように動いてみたりする。同じ仕事にしばらく就いてみるということもある。これは「模倣」であるが、こうするのはあくまで役を「真似て」「なぞる」ことで「他の主体の」感じ方をつかもうとするからである。用語事典の説明に沿えば、こうすることで役者の人格の一部は変容しているともいえる。ただ、この場合の同一化の作業は意識的かつ能動的であるが故に、その変容によって人格が影響を受ける度合いは、「自然に」同一化が起こる場合とは異なるであろう。

「相手の身になる」という日常的表現はどうかであろうか。これは役者が役をつかむほどには意志的努力を要さない場合を指すと思われる。相手が自然に持っている同一化の能力を期待して、視点を変え、あたかも相手になったかのようなイメージを描くことを促す言葉である。

ここに挙げたふたつの例は、日常生活からの類推で十分理解できると思われるが、同一化という概念の骨組みは満たしている。しかし、成人の生活での現象であるから、同一化の機制が働いている中でも、いくらか洗練された例であると考えた方がよい。この「洗練された」の意味はおいおい明らかになっていくであろう。次に、この視点から、前著(1997)で示した同胞葛藤の例をもう一度吟味してみたい。同胞葛藤と同一化には、密接な関連があるとされているからである。

### II. 同胞葛藤

Lacan (1938)によれば、同胞葛藤は、新参者

(新たに生まれた子ども)がそれまで母親の人物を独占していた先住者(長子)を悩ませるという形をとる。すなわち母親を巡る三角関係の中で生じるが、重要なのは嫉妬の感情である。嫉妬を自覚するには相手がいい思いをしているということがわからなければならない。それにはいい思いをしている相手の位置に自分を置いてみるということが必要である。ここでまさに同一化の機制が働いているのがわかる。そして、母親といる弟妹を見る自分、母親といる自分から見る弟妹といった視点を獲得していく。ここで、同胞同士の競い合いは、個人間の衝突に見えて、その実、それぞれの個人の内部での、ふたつの対立的かつ補完的な態度間の衝突として見えるのである。

あたかも、長子が弟妹の位置に身を置くという意識的・能動的作業をしているかのような書き方をしたが、母親といる弟妹を見ることで、長子の記憶にある母親との同一化の体験が呼び覚まされ、それが長子自身以外のところで行われているのを認知する、と考える方が実状に近いであろう。また、実際の行動として、あたかも弟妹であるかのように振る舞って、母親の気を引くということもあろう。加えて、同胞間の競い合いのなかでは、叩いたり叩かれたり、取ったり取られたり、泣かせたり泣いたり、といった相互性があり、これが、個人間の衝突に見えて、個人の内部でのふたつの態度の衝突と見える部分なのだが、ここで起きていることは、上に述べたような成人のいくらか洗練された同一化とは少し異なる。意識して同一化を行うわけではない。相手とやったりやられたりを繰り返すうちに、「自然に」同一化が行われている。つまり、関係することで相手の人格が鋳型のように身につく、と考えられる。すなわち、関係することは必ず同一化をとまなうということもできる。こうして、この場合は自と他が同時に構成される。これは、はじめに述べた意識の二重化につながる状態だが、今まであったものに新しいものが加わるのではなく、「同時に」自他両者が

構成される。また二重化といっても、それを意識しているかははっきりしないと考える方がよいであろう。

もうひとつの重要な点は、同胞同士の競い合いを通じて自分と相手以外の第三の対象が生じてくることである。掟やルールと呼ばれるもので、競い合いが敵対だけでなく和解を同時に含むことが条件となる。この第三の対象は競争から生じるが、今度はこれを物差しとして、同時に他者が形成されていく。すると嫉妬の相手はただの相手ではなく、社会化された対象として形成され、自他と社会はさらに豊かに構成されていく。これは二重化から発して心の複雑さへと向かう方向である。

このように、同胞同士の競い合いが建設的に働けば、①同一化を通じて意識の二重化が生じる②敵対と和解のせめぎ合いの中から、社会という第三の対象が生じてくる。逆に、新参者を拒否してその破壊に向かうこともある。この場合はふたりの人間がいることが拒否されているのであり、関係が拒否されているのであるから、同時に、意識が二重化した状態も拒否されていることになるであろう。

そして、ここで挙げた同一化は、I章で挙げた意識的で一時的な同一化とは異なり、人間が歩くことを自然に覚えるかのように関係の成立に必然的に伴うものである。また、それゆえに、人格の分化と形成に重要な役割を果たすことがわかる。

### III. 建設的な自我機能としての、関係の場の分割、視点の移動

英国の精神分析家である J.Padel は、「現在の思考における自我」という論文(1985)で、自我の概念に、個体を基礎とする一者心理学的なもの、関係性を基礎とする二者または三者心理学的なものがあることを指摘している。そして現在重要なのは後者の方で、その際鍵となるのが同一化の機制であると、その自我機能との関わりを考察している。ここでは上に挙げた内容が少し違っ

た角度から詳しく検討されている。

まずは、同一化を通じて意識の二重化の状態が生じる、という点について見てみよう。Padei の言葉を用いれば「現在その人が関わっている場を分割すること」ということになる。「人やものに同一化するときは、(同一化された当の) その人やもの以外は排除される。それにより、場 (field) が分割される。同一化することが主要な自我機能であるならば、分割することは密接かつ必然的に、同一化と関連する。言い換えると、分裂 (Splitting) が、選択行為と同時に、もしくはそれより先に生じている。しかしどちらが生じる前には場は複合的なものに見えるはずである。少なくとも相互に関係するふたつの要素からなるに違いない。従って、それがひとつの複雑な場であるという認知を維持することと、それを分割することもまた、主要な自我機能である。」(著者はここで、おそらく防衛機制を意識してか「分裂 (Splitting)」という言葉を用いているが、建設的な自我機能について論じていることから、他の大半の箇所では分割 (Division) という言葉を用いている。)

ここでも意識しやすい例を考えてみることにする。たとえば少人数のグループで議論をしているところに加わる時のことを想像してみよう。はじめはグループの中で何が起きているかわからないので、それは複雑な対人の場として現れる。メンバーに加わってしばらくすると、自分と似た立場の人がいて、その人につくような形になる場合があるであろう。ここですでに同一化が生じており、その人をピックアップした時点で場は分割され、それ以外の人とは同一化の対象から排除されている。

同一化という機制そのものの中に原理的に分割が含まれるということがこの指摘の鍵となる部分であろう。同一化を行うときには同時に対象の選択が行われている。こう考えることで、選択されなかったものは何かに注目することもできる。再び I 章で挙げた例と比べてみよう。役をつかもう

としたり、相手の身になるという場合は、「あたかも相手のように」ということにウェイトが置かれているのに対して、ここでの「複雑な場を分割する」という場合は、混沌の中から手掛かりを得るという、相手もしくは視点の選択にウェイトが置かれている。

次に、「視点の移動と第三の対象」について見てみよう。著者は、Freud の『ナルシズム入門 (1914/1969)』における対象選択の型の二種を引いて、母親と子どもの関係について論じている。その二つの型とは、与え手としての母親的養育者に同一化するか、受け手としての幼穉的自己に同一化するか、ということである。「しかし、一方または他方のどちらかに同一化するという選択ができるという、まさにその事実こそ、彼が第三のポジションをも採用したということを意味する。その位置から、自己—母親を一組のものとして観察し、しばらくはどちらにも同一化しないということができよう。その分離した観察する自己は第三の項になり、二者関係から三者関係を創り出す。この新しい、観察し内省する自己は、今や自己—母親複合体の一方または他方の端に、今までより一層よく同一化することができ、さらにどちらかの同一化を行うことで、二者関係を再確立する。」

母親という子どもが、母親の身になってものを感じるという作業を意識してするわけではない。しかし、母親と関係するという事それ自体の中に、母親の属性をわがものにするという同一化の過程が含まれている。取り入れという言葉を用いた方が正確かもしれない。また、模倣が見られるのも普通のことである。このようにして母親の「ように」ものを感じるができるようになってゆく。また、第三のポジションが得られるということは、二人の関係を客観視できるということでもあるが、最も印象的な表現は、人形遊びの中にみられるであろう。人形の操り手として、親役も子役も同時にこなすことができる。こうして親

子関係を第三のポジションから体験した上で、再び二者関係に戻ることもできるわけである。

再び小集団の例でみてみよう。新しく加わった参加者は、自分に似た立場の人に同一化して議論をすることで、はじめに選択しなかった（たとえば反対意見の）人たちの考えを吟味することができる。また、反対の立場の人に同一化して、はじめに同一化していた人の考えを吟味することもできる。こうして視点を移動しながら、時には誰とも似ていない立場から全体を眺めて、自分の考えを練っていくこともできる。加えて、第三の視点を得たところでもう一度はじめの同一化に戻することで、相手に対する認知はさらに豊かになる（著者は「対象を再発見する」という言葉を用いている）。

Padel はこの論文の最後で、この第三のポジションについて、「私に足場が与えられれば、地球を動かしてみせる」と主張したアルキメデスの発見を引き合いに出している。そして端的に、「誰でも、母親の膝に座って父親に微笑みかけ、父に肩車されて母親の気を引いたことがあるであろう」という印象深い例を挙げている。

この第三の視点の発生について、Lacan では、競争によって、敵対と和解の中から生じてくるとしており、三角関係が果たす役割を重視しているようである。その内容も掟やルールといった社会的な対象である。一方 Padel では、第三の視点の発生機序については明確には触れられていないし、掟やルールといった社会的要素との関連もはっきりとはしない。ただし、第三の視点の関係についての認知を豊かにするという点では一致している。

同一化が生じることで視点の選択が行われ、関係の場が分割される。心にふたつの要素もしくは極が生じ、視点の移動を通じて場は両極から吟味されると同時に、第三の点からも眺められる。再び両極の視点に戻ること、関係の認知は豊かになっていく。こう書くときあたかも意図的に行われ

るように感じられるが、実際はおそらく自然の能力として、ほとんど自覚せずに行われるのであろう。こうして同一化を通じて内在化された関係は、自分に自然に備わっているものとして人格の形成に重要な役割を果たす。さらにこのような、当然のこととして意識していない同一化に気づいていくことで、つまり第三の視点から眺めることで、その影響力を相対化し、意識的・一時的同一化に近づけることができるのではないだろうか。そうすることでさらに複雑さは増していくと考えられる。

ところで Padel は同じ論文の中で、立場を変えて同一化することの日常的な実例を示す際に、こう述べている。「私たちはこうしたことをいつでもやっている。しかし、それが最も柔軟にできるのは、私たちがその関係に対して傍観者で、一方に反対して一方の肩を持つ必要がないときである。」また、上に引用した、第三のポジションについての記述に続けてこうも述べている。「病理性はこの 3 つのポジションのどれかひとつをとる能力がないか、あるいはその能力が弱まっていることに端を発するのではないか。」前者を言い換えれば、一方への同一化のみを強制するような情緒的圧力があれば、それは立場を変えて同一化することや、意識の二重化を維持することに対する妨げになるということであろう。後者についても同様で、視点の移動を妨げている情緒的背景もしくは関連があるはずである。

このようにみえてくると、これまでの記述は、健康な、いわば理想的状態での自我機能であった。しかし実際にはうまく機能するのが困難な場面が数多くあると考えられる。次章では、視点の移動が難しい、すなわち心の中にふたつ以上の要素を保持するのが難しい状況について考察することしよう。

#### IV. 防衛としての同一化

Winnicott (1965) の言う偽りの自己とは、健康な場合ならば社会的態度に示されるような適応的機能を指すが、極端な（病的な）場合は本来の自発性（本当の自己）を隠蔽し保護し、環境からの要求に迎合（compliance、盲従または服従）することを主要な機能とする場合を指す。「母親とか保母とか叔母とか兄弟あるいは当時主役を演じていた人物ならどんな人物でもよいわけだが、そうした人物そっくりに成長するわけである。」「極端な偽りの自己の発達例では、本当の自己は完璧に隠蔽されているために、自発性が幼児の生活体験のなかで前景に出ることはない。逆に、服従が前景に出る。本命はもの真似だからである。」また、本当の自己が現実感をもつものに対して、偽りの自己の存在は非実在感や空虚感につながるし、部分的には高度な仕事ができても、まとまりのある人格が期待されるような状況では欠陥をもつことになる。

この偽りの自己の成因について、Winnicott は非常に早期の母子関係にあると考えている。適切な母親（Good-enough Mother）が幼児の自発的な身振りとその背後にある万能感に表現の形を与えることができるのに対し、不適切な母親（Not Good-enough Mother）はそれができず、「幼児の身振りに繰り返し失敗することになる。逆に、彼女は、幼児が服従してはじめて意味をもつような自分自身の身振りで代用する。」つまり、母親の身振りに幼児を適応させているのである。こうして幼児は自発性に従って関心を広げていくのではなく、服従を関係の原型として、偽りの関係をつくっていくのである。

ここで働いている同一化について、これまでみてきた同一化と比較するとどのようなことが言えるであろうか。最も特徴的なのは、同一化のみがあって、当の同一化を行う主体が十分に形成されていないということである。同一化を行う主体については、はじめに挙げた、役を演ずるといった

成人の同一化では当然の前提とされていてほとんど問題にならなかったことである。Ⅲ章で母親に同一化したり自分に同一化したりということを書いたが、これはやはり幼児の自発性の展開として自然に行われることであり、これと比べるといかに極端な状況であるかがわかる。意識の二重化について考えみると、非実在感や空虚感を感じることはでき、自分の生が偽りであるという自覚を持って治療に訪れるということからすれば、今の自分に違和感を持つという点で、何らかの二重化をなしているとも言える。しかしこれは偽りの自己の機能で、いわば何か「ない」というネガティブな認識であり、本当の自己の側に視点を移動してもものを感じることができないわけではないのである（「想像を絶する不安」を感じることにそれにあたるかもしれない）。病因について言えるのは、関係における極端な不均衡ということである。すなわち相手のペースと自分のペースの不均衡である。両者のペースがある程度均衡していると言える状態で、はじめて意識の分割ということも可能になるのではないだろうか。

Rycroft (1968) は、「神経症者がまわりに及ぼす影響」という章で、神経症患者が意識的、無意識的に相手に振り当てた役を引き受けてしまいやすい（つまり同一化しやすい）人がおり、場合によっては、その人の同一性を危うくさせることがあると述べている。ふたつの例が挙げられている。ひとつは「治療者が極端に患者に同一化し、求められている役を必死に演じようとする場合」、もうひとつは「患者が人間関係をもつばら同一化の機制の上に構築しようとするとき」で、このとき患者は相手のふるまいを取り込み、転移では治療者を理想化し模倣するという色彩を帯びるという。どちらの場合も同一化の機制は、憎しみと恐れの対象に向けた防衛として用いられている。前者ではそれを何とか理解したいという欲求によるし、後者はそれに降伏して自己を明け渡す以外になか

ったことによる。このような考察から、神経症患者の周囲の人がいかほど病的影響を受けるかは「その人たちが当の神経症者に対する敵意（恐れ、憎しみ）を防衛するために、いかほど同一化の機制を用いるかにかかっている」と述べている。

これも深刻さの程度は異なるが、偽りの自己に非常に近い例である（特に後者）。ここでの「神経症患者」と偽りの自己の場合の「不適切な母親」とを入れ替えてみるとよい。するとまた別の視点を得ることができる。役を「振り当てる」人と、「引き受けてしまいやすい」人がいるということである。成人の意識的な同一化では、「相手のようになる」ことに強調点があったのに対し、ここで問題になっているのは同一化の「用法」、同一化が働く情緒的背景である。成人の例をこれにひきつければ、その役をやることを、どのような動機で決めるのか、となる。この例では「憎しみと恐れの対象（Winnicottでは、『想像を絶する不安』）を避けるために、目前の「手本となるもの」に同一化している。「溺れる者はわらをもつかむ」という表現が適切であろう。また、影響の受けやすさは防衛としての同一化を使う程度による、とあるが、早期の関係においては、他の方法がほとんど存在しないことも指摘されてよい。

このように、防衛としての同一化では、関係において単一の状態をつくりだし、健康な場合のように、二重化→複数化の方向に向かわない。それは、いわば悪い対象の情緒的圧力によるものである。「恐れられているもの」と「その助けとなるもの」といった分割はなされているであろうが、後者へのしがみつきもしくは固執への必然性が強く、この分割を建設的に活かすことができない状態であるといえる。

## V. 原始的同一化

Freud (1921/1970) は、集団のメンバーがカリスマ的リーダーを理想化し依存するような形で同一化を行い、その結果各々のメンバーが個性を喪

失するさまを描いている。これに対して Bion (1961) は、基礎仮定集団と呼ばれる集団については逆の動きも同時に存在することを示した（基礎仮定集団とは、集団に共有される明示的な目的がなく、リーダーもはっきりしないような構造の弱い集団を指す）。すなわち、集団の側が願望を投げかけることでリーダーを操作するような形での同一化である。リーダーは誰かの空想の一部分を演じさせられているかのような感じを抱かされる。このような集団の願望を敏感に感じ取って自らの個性を消滅させ、期待されるような役割をとる人物が、基礎仮定集団のリーダーとして選択されるという。「リーダーは、他のメンバー同様に自分自身であるための自由を持っていない。」そして、このような状況では現実についての麻痺感が存在することに触れ、これを振り切り明晰に考える能力を持つことが、集団の分析家としての必須条件であるとしている。

個人療法の場面では、Kohut (1971) の見いだした自己愛転移がこれに似た状況を示していると思われる。自己の構造が脆弱な患者の分析で現れてくる特有の転移関係で、理想化転移と鏡転移の二種類が観察されている（後に分身転移が加わって三種となったが、ここでは省略する）。理想化転移では治療者は全能の対象として理想化されるが、それを共感的に認め続けねばならない。鏡転移では、治療者は誇大的になった相手に鏡として確証を与えるだけの役をとることになる。いずれにしる、それを拒絶するような些細なサイン（声の調子の変化など）であっても患者は敏感に反応し、抑鬱や空虚感で反応したりする。しかし、治療者には患者の空想は一方的なものに感じられ、あたかも患者の側で勝手に作ったストーリーの中に完全に取り込まれて治療者の人格などないかのごとくに感じられる。もしくはあたかも患者の身体の一部であるかのように当たり前のように共感的応答を要求されていると感じられる。そして治療者は注意の集中が困難になってきたり、自分自

身でいることに困難を感じてくるという特徴がある。

これらの例でまず印象的なのは、場の中にいる治療的役割を持つ者の反応である。自らの意思とは別の強い力に影響を受け、同一性を失う危険に晒されて、麻痺感や注意集中困難を感じている。意識の分割を維持することが非常に難しい状態である。これはここで働いている同一化が、はじめに挙げた役を演じるという例のように人格の一部が変容するのではなく、全面的な変容を指向していることを示している。場は分割されるのではなく単一化される。同一化の対象は選択されるのだが、全面的な単一化のための選択なのである。もうひとつの特徴は、ここでの同一化が他者変容的であるということである。つまり、自分の一部を他人であるかのように変容させるのが自己変容的であるのに対して、他人を自分であるかのように、もしくは自分の空想の内容であるかのように変容させるのである。IV章に挙げた防衛としての同一化は自己変容的であったが、これとちょうど逆である。(ただし、「役を振る人」のように防衛として他者変容的な同一化が用いられる場合もある。これは一般に、「投射による同一化」と呼ばれている)。

別の視点から見てみよう。自己愛転移の場合であるが、これは過去の同一化の再現である。つまり、幼児の主観では魔法のような完全性と力を持っていると感じられる親、何をやっても目を輝かせて当然のようにほめてくれる親との同一化の再現である。Winnicott のいう「幼児の自発的な身振りとその背後にある万能感に表現を与える親」も同様であろう。そう考えるならば、そこで起きていることはIII章で述べた母子関係を幼児の主観の側から見ただけなのかもしれないし、そうだとすれば意識の二重化も排除されるものではない。しかし、問題はこれが成人の関係で出現していることである。早期の関係が成人同士の関係に再現されれば、当然、その時点では不均衡なものとな

る。この不均衡な役を振り当てられるところに、特徴的な反応が生じるのであろう。

以上、前半は同一化の形成とその建設的機能について考察し、後半は防衛としての同一化、原始的同一化について検討した。特に、Padel が示した場の分割・視点の移動・第三のポジションを通じての対象の再発見という建設的機能を意識してみることは、臨床場面への示唆も大きいと思われる。また、防衛としての同一化や原始的同一化も、臨床場面ではよく経験する現象である。今後は臨床経験とつきあわせることでより細部を明確にすること、「場の分割」からさらに進んで、ふたつの力の葛藤ということについて考察を深めたいと思っている。

#### 引用文献

- 青柳寛之 1997 競争心についての一考察 甲南大学学生相談室紀要, 4, 13-21
- Bion, W.R. 1961 Experience in groups and other papers. Associated Book Publisher.
- 池田数好訳 1973 集団精神療法の基礎 岩崎学術出版社
- Freud, S. 1969 (邦訳) ナルシシズム入門 フロイト著作集 5 性欲論・症例研究 人文書院
- Freud, S. 1970 (邦訳) 集団心理学と自我の分析 フロイト著作集 6 自我論・不安本能論 人文書院
- Kohut, H. 1971 The analysis of the self. 水野信義・笠原嘉監訳 1994 自己の分析 みすず書房
- Lacan, J. 1938 La famille: le complexe, facteur concret de la psychologie familiale. Encyclopedie Francaise, Paris Larousse. 宮本忠雄・関忠盛訳 1986 家族複合 哲学書房
- Laplanche, J. & Pontalis, J.B. 1976 Vocabulaire de la psychanalyse, 5th edition. Press Universitaires de France. 村上仁監訳 1977



- 精神分析用語辞典 みすず書房
- Padel, J. 1985 Ego in current thinking. International review of psychoanalysis, 12, 273-283. G. コーホン編 西園昌久監訳 1992 英国独立学派の精神分析－対象関係論の展開－岩崎学術出版社
- Rycroft, C. 1968 Imagination and reality. The Hogarth Press. 神田橋條治・石川元訳 1979 想像と現実 岩崎学術出版社
- Winnicott, D.W. 1965 The maturational process and the facilitating environment. The Hogarth Press. 牛島定信訳 1977 情緒発達の精神分析理論－自我の芽生えと母なるもの－岩崎学術出版社

---

## ABSTRACT

### Notes on Identification and Doubling of Consciousness

AOYAGI, Hiroyuki  
*Konan University*

I discussed the concept of identification and doubling of consciousness. First, John Padel's contribution is examined. Identification is a prime ego-function, and is occurring together with object relationship. Dividing the field is necessarily associated with it. Then, doubling of consciousness is introduced. It means a third position is adopted. And the complexity of mind is increased. Second, I discussed identification as defense mechanism. "False self (built on compliance basis)" and a person who is easily influenced by projective identification are examined. Finally, I discussed primitive identification. A specific emotional pressure on analyst, and example of projective identification in basic assumption group and narcissistic transference are examined.

*Key Words* : identification, division of the field, a third position, defensive identification, primitive identification

---